



ホセアとゴメル 銅板画 Lyon, 1547

預言者ホセアの妻は、ディブライムの娘ゴメルと記され、北イスラエル人です。北イスラエルは、「淫行にふけている国」であるためにゴメルは「淫行の女」であり、生まれた子どもたちも「淫行による子ら」と烙印されています。「ゴメル＝淫行」という図式になります。ゴメルは「パンと水、羊毛と麻、オリーブ油と飲み物をくれる」と信じ、愛人たちを追ったと記されていますが、ホセアはこれらの日用品をゴメルに与えなかったのか、と疑問が残ります。ゴメルは無言のまま、断罪され、完全な、一方的な愛によって、赦されるのみです。

神は「淫行」のゴメルを娶るようにホセアに命じます。不品行、売買春、姦淫などの「淫行」の中で生きたゴメルは奴隷になったと記されています。「淫行」の悲劇の結果は「奴隷」です。神はゴメルを愛せとホセアに命じます。「淫行」も神は見過ごさず、関わるとホセアは伝えています。

ホセアが「淫行」として告発しているのはゴメルの性だけではなく、北イスラエルの問題です。ホセアはまず最初に「この国の住民」(4章)への告発をしています。北イスラエルはベテルに金の子牛を置いて聖所としました。その地はエフライム族の嗣業の地であるサマリアです。人々は「誠実さも慈しみも神を知ることもない」というのは、司法、福祉、教育が機能せず、弱い貧しい者たちが捨て置かれているということでしょう。「呪い、欺き、人殺し、ぬすみ、姦淫を行い」と評しています。その原因は「流血に流血が続いているから」です。戦争に明け暮れた国の悲劇です。

一番に責任を負うべき者は「祭司」(4,5章)であるのに、祭司が「民の贖罪の捧げものをむさぼり/民が罪を犯すのを当てにしている」と告発します。「知識を退け、律法を忘れて、偶像の虜になっている」と言います。偶像とは、「法衣を盗んで着ている魔物」のようで、まるで日本の「積極的平和主義」かのようなのです。

「王の家」(5章)も告発されます。彼らは悪事を少しも意に介さず、取り巻きの高官たちも、欺き、悪事を喜ぶ始末です。「高官たちは自分で吐いた呪いのために剣にかかって倒れエジプトの地で物笑いの種になる」(7:16)という言葉は日本での最近の事件を思い起こさせます。アッシリアに、エジプトに、と大国に貢を納め、安泰を図ろうとします。「核の傘」という安保法制に頼る日本と同じです。その結果、富を得て、宮殿を建て連ね、祭壇を増してきました。箱もの行政をする日本と同じです。

「淫行」とは欲望、高慢のなせる業であり、これは自らを失い、奴隷となる結果を生むのです。このような生々しい事態は現在の日本の姿と変わらないように思えます。そのため、ゴメルは私たちだと思わずにはいられません。



イエスと姦淫の女 G. F. Barbier

ホセアは厳しく告発し、神の裁きがあると警告しても、北イスラエルを憐み、民を愛さずにはいられないのです。「行け、夫に愛されていながら姦淫する女を愛せよ」(3:1)と神に促され、ゴメルを買い戻したように、「淫行」の民に対して、告発と嘆きの言葉だけではなく、「さあ、我々は主のもとに帰ろう。(6:1)「ああ、エフライムよ お前を見捨てることができようか。」(11:8)「わたしこそあなたの神、主。私は再びあなたを天幕に住まわせる。」(12:10)「イスラエルよ、立ち帰れ あなたの神、主のもとへ」(14:2)

と繰り返し、回復と祝福の言葉を伝えています。ゴメルに新生の希望が与えられるのです。